はるかニライ・カナイ

灰谷健次郎

理論社

はるか

江苏工业学院图书馆
藏书章

风谷健藏郎

理論社

理論社ライブラリー
はるかニライ・カナイ

NDC913
A5変型判 21cm 266p
1997年5月初版
ISBN4-652-01129-6

作者　灰谷健次郎
画家　坪谷令子
発行　株式会社 理論社
発行者　下向 実
制作　山村光司
〒162 東京都新宿区若松町15-6
電話 営業 (03)3203-5791
出版 (03)3203-5794

1997年5月第1刷発行

©1997 Kenjiro Haitani & Reiko Tsuboya Printed in Japan.
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

はるかニライ・カナイ

画／坪谷令子　装幀／多田　進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

もう日か暮れかけようとしているのに、ケイは家へ帰ってこない。
ユウナはケイか、とこにいるのか、たいたい分かっていた。
「ケイ、また帰らないネ」
母さんかいった。
ユウナには母さんの気持ちか分かっていた。
父さんか帰る前に、呼んておいて。そういっているのた。
父さんは子ぼんのうた。海や畑からもとってきて、子ともの姿か見えないと、きけんか悪い。
「自然の中て、子ともと動物かいれば、ほかになんにもいらん」
父さんの口くせてある。
「母さんは」
いちばん上のシノが、そんな父さんへ、とかめるようにいったことかある。
「入れてやるか。母さんも」

「なに、いうの」
ノノは父さんの肩を、ひしゃっとたたいた。
「女はこわい」
父さんはそういって笑う。
とんなに考えても、母さんは、父さんにも子ともにも、やさしい人た。人たけしゃない。小さな生きものにも、草や花にも、心くはりしているように見える。
「南の島の人間は、みな、そうしゃ。木に実かなるしゃろ。三分の一は神さまに感謝して人かいたたく。三分の一は子孫のために残しておく。あとの三分の一は、人以外の生きものたちのために、手をつけすに、やっぱり残しておく」
ユウナの好きなテナオハアは、ユウナに、そう教えてくれた。
そうか、とユウナは思った。
この島の小鳥や蝶たちは、みな元気かいい。元気かよいといっても、せかせかしているわけしゃない。なんとなくのんひりしているし、あるときは歌てもうたっているように楽しけだ。
生きものか楽しそうなのは、みんなで、分け合って暮らしているからなのか、とテナオハアの話から、ユウナは思った。
ユウナは外へ出た。
アタノの実は、また青い。やかて赤くなる。

ユウナはぴょんぴょん飛ふようにして海の方へ行った。
漁から帰ったオシイたちが、魚を漁協の前のたたきに並へている。それを買おうと品定めしているオハアたちがいる。
南島の海の魚はカラフルた。
赤、青、黄、緑、とんな色てもある。なんてもあり、という感した。
「島の魚はおけしょう上手」
オハアたちはそういう。ほんとに、その通りだと思う。
「ユウナ。今ころ、どこへ行くか」
アキ兄ィかいった。
アキ兄ィは、この島で数少ないもぐり漁の漁師だ。離島はどこでも、オジイ、オバアの人口が多く、若者は少ない。
もぐり漁は魚を網においこむ漁と、ヤスて魚を突く漁の二つある。とちらも体力を使う。
オンイで、もぐり漁をやる人はいない。アキ兄ィと、アキ兄ィの妹をヨメにしているケン兄ィと、画家て東京からこの島へきて住みついてしまった丸本先生か、もぐり漁見習いというところて、丸本先生を入れても、この島のもくり漁師はたったの三人というわけた。
もっとも、おかずていとの魚を海へもぐって、ヤスて突いてくるという人はいくらてもいて別にめすらしいことではない。

もともとこの島は、自給自足の島だったのである。
アキ兄ィに、どこへ行くか、と問われて、ユウナは口こもった。
ケイか、日か暮れかけても帰ってこない理由は、アキ兄ィに関係がある。
ま、いいか。どうせアキ兄ィも知ってることだし、とユウナは思った。
「きのう、ヤギ狩りに行った？」
「ああ、行った」
そう答えて、アキ兄ィは、はたと気がついた。
「ケイのやつ、また……」
「そう。また、ヤキを見てるんでしょう」
ユウナは、つんとして、ちょっと冷たくいった。
「よし。まっとれ。オレも行く」
いいよ、ひとりで行くよ、といえなくなって、ユウナは仕方なく、アキ兄ィの後について、わざと、ぶらぶら歩いた。
アキ兄ィは、きょう、とった魚を、漁協に入れていた。漁協に入れるといっても、もぐり漁でとれる魚は、ミーバイ（ハタ科の魚）やシチュー（メジナの仲間）など、島の人の好む魚か多いので、まっていたように、つぎつぎ売れてしまう。
「ユウナ。魚、買いにきたんか」

オハアのひとりか声をかけた。
「ううん」
「なら、家へ帰って、母さんの手伝いをせんかい」
「うん」
ユウナは素直にうなずいた。
島ては年寄りにさからう人はますいない。
年寄りの持つ、深い知恵や、人や、生きものによせるやさしさか、なにより大切たと島の人は考えているからた。もちろん子ともはその影響を受ける。
アキ兄ィのとってきた魚は、たちまち目の前から消えてしまった。
「行くか」
アキ兄ィはきけんかいい。きょうは漁か良かったのたろう。
漁港にそった道を、まっすく歩いて、おもに観光客相手の、喫茶店兼スナノク「うりすん」の前の道を右にとる。
すくに大きなカシュマルの木かあって、そこから先は、モクマオウの林た。
林の中は、うす暗く、少しゆたんをすると蚊か刺しにくる。
おたかい分け合って暮らすといっても、蚊に血を分けてやるのはいやた。
ユウナは、ふとももを両手て、パチパチたたきなから、林の中を歩いた。

「いくらヤギをつかまえたの？」
ユウナはアキ兄ィにたすねた。
「きのうはダメた、四頭た」
四頭もとればじゅうぶんじゃない、とユウナは思う。
島には野生のヤキがたくさんいる。野生といっても、もともとは人が放したヤキか増えただけなのだか。
ヤギ料理は島の人のごちそうてある。おまつりやお祝い事にかかせない。
そのときのために、アキ兄ィたちは、ときとき、ヤキ狩りにいく。
おもしろい風習がある。
野生のヤギでも、それぞれの持ち主がいる。最初にヤキを放した人や、ヤキのいる土地の持ち主がそれにあたる。
ヤギ狩りで、ヤギをとらえてくると、持ち主のところへいって、
「おたくさまのヤギをつかまえました。いかがいたしましょうか」
という。持ち主はこころえていて、
「それはご苦労さま。とらえたヤギは、あなたのご自由にしてください」
と返事する。
「ありかとうこさいます。それでは、そうさせていたたきます」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そんなふうに、やりとりは決まっているのである。
一種のセレモニーみたいなものだ。
ヤギを解体すると、まっさきにヤギの肉の一部を持ち主のところへ持っていく。あとは、みんなで分け合うのだ。
「子ヤギ、いた？」
ユウナはきいた。
「いた」
やっぱりとユウナは思う。
ヤギにも家族やグループかある。とらえるとき、子ヤキかましるときもある。
「またケイは、自分で飼うというよ」
「いうかな」
「いうに決まってるしゃない。困るのは母さんたよ」
「そうたな」
アキ兄ィも少し困った顔をした。
動物の子を親からはなして飼うのはたいへんなのてある。夜通し鳴くし、一時間おきくらいに乳をやらなくてはいけない。子どもにそんなことのできるはすはないから、結局、母さんの負担になるというわけてあった。

やっぱりケイはいた。
木につなかれているヤキの前にしゃかみこんている。
遠くから見ると、ヤキと話をしているようにも見える。
「ケイ。父さんか帰ってくるよ。いいかけんにしなさいよ」
ユウナは、そういいなから、ケイに近ついた。
「うん……」
ケイは生返事をした。
「動物か好きなのはいいか、動物と人をいっしょにするのは、おまえの悪いくせた」
とアキ兄ィがいった。
ケイはたまっている。
とらえてきたヤキは、二、三日、木につないておく。自分の運命か分かるのか、その間エサを食べようとしない。まわりにいっぱい草か生えているのに見向きもしないのたった。
子ヤキはカン高い声てないた。
「もう家へ帰れ。ヤギは二、三日すれば、なれて、草を食へるようになる」
アキ兄ィは、ケイにいった。
「この子ヤキの親は逃けたの?」
アキ兄ィの顔を見ないて、ケイはたすねた。

（鋭いやつたなァ）
アキ兄ィは舌を巻いた。
ヤキの群れは七頭だった。
群れを追いこみ、退路を絶って、しかけた網に突っこんでくるようにしむける。
その途中で、三頭のヤキは逃けた。そのとき、子ヤキは親とはくれたのだ。
とらえられ、木につなかれたどのヤキにも、すり寄っていこうとしない子ヤキのようすを見て、ケイは、それを悟ったのだろう。
しかたなく、アキ兄ィは、
「うん。逃かした」
と返事した。
「しゃ、ぼくか飼うよ。親かいないんたから」
アキ兄ィは困った顔をしてユウナを見た。
「ダメ！」
ユウナはぴしゃっといった。
「あなた、この前もウリンコ（イノンンの子ども）の世話をするといって、母さんにめいわくをかけたしゃない。母さんがいそかしいのを、よく知っているくせに」
「めいわくかけない」

ケイは小さな声でいった。
「あなたか夜中に起きて、お乳をあけられるわけかないしゃない」
「夜中に起きる」
「子ともはいっぺんねてしまうと、起きることはできないの」
ユウナは、「の」のところをつよく発音した。
「起きる」
「口先はっかり」
ユウナはケイを軽くにらんだ。

夕飯のとき、あんのじょうケイは子ヤキの話を、父さんと母さんに切り出した。
「無理たね。おまえには、またまた動物を飼う資格はない」
父さんは、にへもない。
「人間と同じように生きものをかわいかるのは、一見やさしい心のように見えるか、それは生きものを見下した、よくない接し方た」
「とうして」
ケイは食い下かった。
「大や猫なら友たちてもよい。ヤキやイノシシやフタは人間の食へ物た。牛もニワトリもそう

だね。いのちを食べるのはざんこくなようたか、自然はその上で成り立っているんだ。その約束事はだれも破ることはできない。おまえはまだそれが分かっていないから、父さんは資格がないというんだ」

ケイは下を向いた。

父さんも、アキ兄ィと同しことをいっている。

「おまえは子ヤギがかわいいから飼おうと思うのだろう。かわいそうだから飼おうと思っているのかもしれない。子ヤギの生きている立場が分かっていないおまえに飼われたら、子ヤギはめいわくた」

「父さんのいうことは分からない」

とケイは反抗的にいった。

「今、すぐ分からなくてもかまわない。しかし、父さんのいったことは、よく考えなさい」

それくらいにして、ご飯を食べなさい、と母さんが、とりなすようにいった。

テーブルの上に、こちそうが並んでいる。

アカユー（アカマツカサ魚）の塩煮、コーヤチャンプル（ニガウリと豆腐炒め）、豚肉とコンブと大根の煮物、ホウレンソウの卵とし。

料理上手の母さんか、作った品々た。

「父さん、ヒール飲むの？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com